

## さよならなら 村上三島先生

二六回生 瀧 梢

(大森)

三人の兄たちに連れられて吹田の村上三島先生宅二階の習字教室に初めて行ったのは昭和二十六年、私が小学三年生の秋でした。皆で吹田まで習いに行っていたのは、母が三島先生夫人の女学校時代の教師をしていたので奥様と戦前から懇意にしていたからでしょう。兄たちは吹田一中でも教えを受けたようです。我が家のお向かいの礼子ちゃん（千里山会会員高橋礼子さん）と一緒に通うのが楽しみだった時もあります。お稽古場では先生は奥の部屋で大人のお弟子さんとおられることが多く、子供たちが騒いだりふざけたりしていると、時々「うるさいぞ！先生は瀬戸内海の子孫やぞ！」と笑いながら叱っておられました。私だけは何故かお稽古を止めず、高校生になると大人のグループに入り、習字ではなく書道習う雰囲気となりました。先生が折手本に直接書いて下さりそれ

を家で練習して持っていくのです。ずっと後には研究会で弟子が自分で作ったオリジナル作品をみていただくだけになりましたが。先生直筆の王羲之や王鐸の臨書折手本は私の宝物です。大学に通っているときは先生のお嬢様方の英語の家庭教師をお引き受けしていたので、教える日とお稽古日を合わせて、村上家に着くと折手本を奥様にお渡しし、帰り際にいただくといういい加減な弟子でした。

さて、私が結婚した頃、夫は一九七〇年の大阪万博のための万博ホールの設計責任者として多忙な日々を送っていました。ホールの内装にかかっていたころでしょうか、ある書道団体からホールに書を寄贈して掛けたいとお話がありました。当時、国をあげての万博にさまざまな団体・企業が施設参加という形で協力参加してくださっていたそうです。ホールに書の額を飾るのは自分のイメージにそぐわなかったもので、夫はきっぱりお断りするつもりでした。その内、書の団体のトップの方が面会に来られるというので、どうしても会わねばならないことになりました。

その日、万博協会本部ビルの一室で「はじめまして」

とお互いに名詞を交換して、双方が同時に「あのー、もしかして」「家内の先生では？」「梢ちゃんのご主人では？」と声を発したそうです。いただいた名刺には村上三島とあったのです。先生と夫の不思議なご縁の出会いでした。

座の雰囲気が一変して和やかになりました。そういうことならというので、書を飾るならこういうアイデアでと、夫は考えを述べました。ホールのホワイエ東壁面を全面使っていただけることも提案しました。先生も乗り気になってくださり、後日、関西書壇の重鎮、梅 舒適、今井凌雪の両先生を率いて大阪市内の旅館に向いてくださり、一晩かかって構想をまとめることになりました。夫がこういふ感じだと、持参の正確な壁面図面にスケッチすると、三先生がすぐさま筆を取って縮小の横長の紙に自ら筆を取られイメージを具現してくださったのでした。ホール左側の通路の大壁書は他に例を見ない競作の傑作となりました。万博ホールは平成十七年春解体されましたが、この作品は前もって外され、日本書芸院に保管されています。

万博が終ってから六年近くの東京在住の間、私は筆

を持つことも無く過ぎていきましたが、大阪に戻ってきてもう一度弟子入りをお願いしました。既に先生は日本有数の書家で、新弟子は取っておられなかったのですが、快く引き受けてくださいました。素人がプロの書家に混じって学ぶのは大層辛いものですが、先生は最晩年まで私を苗字でなく名前と呼んでくださり、プロとして書の世界を極めるようにとも勧めてくださいました。夫の仕事も手伝っていましたが、怠け者の私では到底無理と逃げてしまい、先生の期待に応えられなかった事は申し訳ないことでした。

平成十七年十一月の月一回の研究会には先生はご欠席で、それまでも時々お休みされることがあったので、何も思わず高弟の方に作品を見てもらっていました。それから十日あまり後のご逝去でした。後日お嬢様に伺った話ですが、八月二十五日の九十三才のお誕生日頃までお元気で、絶筆となられました日展作品を書き終え、ご家族でのお誕生日のお祝いの席で一人一人に感謝の言葉をかけられ、これで作品ももう書かないという主旨のお話をされたということでした。奥様を九年前に亡くされ、その悲しみに心身ともに書く力も無

くされそうなときを乗り越えられ、いつも銘じておられた「生涯現役」を見事に果たされました。

期せずして最初から類い稀な師に恵まれた私ですが、書道の世界では何も報いることも無く恥じ入るばかりです。ただ、暖かい先生のお人柄と、ひとたび筆を持つと変身された魔人のごときもの凄い作家魂に接する

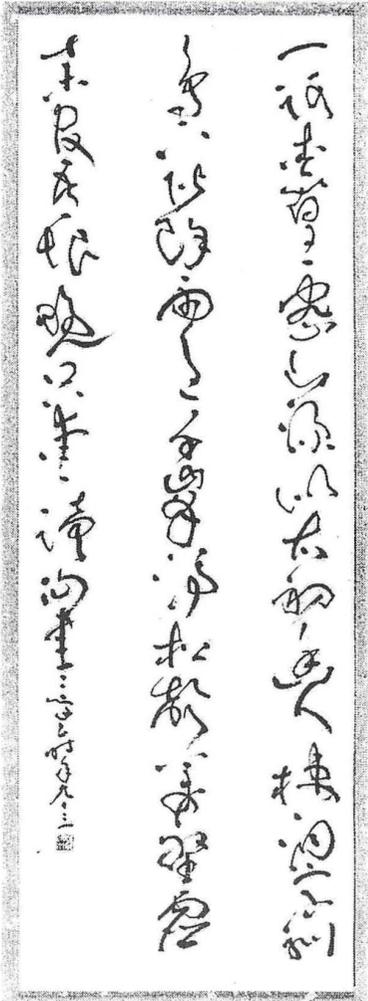
ことができたのは本当に有難いことでした。

付記

村上先生の作品は瀬戸内海、大三島の

村上三島記念館で見ることができます。

(電話〇八九七―八七―四二八八)



「陽靈山」第37回日展(二〇〇五)出品

【絶筆】

編集部より

冒頭に先生の写真及び略歴と本頁に絶筆を掲載させていただきました。本年一月二七日に行われました先生のお別れの会案内状から転載させていただきました。